

縄文時代晩期後葉から弥生時代中期後葉の
遺跡動態に関する一考察

－亀岡盆地をケーススタディとして－

春名秀行

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

縄文時代晩期後葉から弥生時代中期後葉の遺跡動態に関する一考察

－亀岡盆地をケーススタディとして－

春名英行

1. はじめに

近畿地方において弥生時代前期には環濠集落のような縄文時代にみられない集落が出現し、続く弥生時代中期に大規模集落が形成されていく。この形成過程については多くの研究史が存在し、現在も議論されるところである。近年は集落動態の変化を地域単位で検討する試みもなされている(田中・三好ほか2025)

その中で、亀岡盆地は議論の俎上にあまり上がってこない地域である。しかし、亀岡盆地は周りを丹波山系に囲まれている比較的狭い盆地であり、集落の展開がその盆地内で完結している。また、弥生時代前期には環濠集落である太田遺跡が、中期には玉生産の痕跡のある余部遺跡や方形周溝墓群をもつ千代川遺跡、4 北金岐遺跡、5 太田遺跡、6 大淵遺跡、7 余部遺跡時塚遺跡などが存在しており、前期の環

濠集落が消滅し、中期に規模が拡大した集落が各地に出現するという、弥生時代の集落展開のケーススタディの一つになりうる地域であると考えられる。

そこで本稿ではまず、不明確であった縄文時代晩期後葉から弥生時代前期末葉についての土器様相について検討した後に、続く弥生時代中期に集落がどのように移動、拡大したのかについて若干の検討を行いたい。この作業は、弥生時代中期において土器様相がどのように変化していくか、また、近畿地方中央部や丹後地域の集落と比較検討する上でも重要である。



図1 本稿で言及する亀岡盆地内の遺跡

- 1 池上遺跡、2 池尻遺跡、3 千代川遺跡
4 北金岐遺跡、5 太田遺跡、6 大淵遺跡、7 余部遺跡

2. 亀岡盆地における縄文時代後期から弥生時代前期における遺跡の変遷

亀岡盆地の縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺跡は既に集成が行われている(桐井2016)。これを参照すると亀岡盆地の中で縄文時代後期前葉から千代川遺跡や車塚遺跡などで当該期の土器が出土する。その後、後期中葉では遺跡数が減少し、後期後葉では千代川遺跡で宮滝式土器が出土している。縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土器が出土する遺跡は多くなく、まとまった量が出土する遺跡は縄文時代晩期では千代川遺跡と北金岐遺跡があり、弥生時代前期では盆地西部に太田遺跡、盆地東部に河原尻遺跡や池尻遺跡などが立地しており、環濠を備える太田遺跡以外は各段丘上に小規模な集落が点在していたと考えられる。

3. 亀岡盆地における凸帯文土器

(1) 北金岐遺跡第1次調査の凸帯文土器

千代川遺跡第11次調査と北金岐遺跡第1次調査では、縄文時代晩期後葉の凸帯文土器が一定量出土している。北金岐遺跡の凸帯文土器は、中村健二が播磨系の垂れ下がり凸帯文深鉢が存在すると指摘していることでも知られており(中村2000)播磨地域との関係を考える上でも重要である。では北金岐遺跡の凸帯文土器について見てみよう。図4の1、2は長原式の深鉢である。いずれも生駒西麓産胎土である。口縁部の凸帯は口唇部に接して貼り付けられており、刻みは小さい。3、4は口縁部凸帯が垂れ下がって貼り付けられている。また、口縁内面も横ナデが施されている。この特徴は播磨地域で縄文時代晩期後半に製作されている凸帯文土器の特徴であり、中村が「播磨系突帯文深鉢」と呼称している。3、4は「播磨系突帯文深鉢」の中でも口縁部凸帯が大きく下がって貼り付く一群であり、この特徴は拙稿で指摘している長原新段階に併行する特徴で、丁・柳ヶ瀬タイプに共通する(春名2025)。生駒西麓産胎土の土器も長原式新段階の特徴を有していることから整合的である。よって北金岐遺跡出土の凸帯文土器は長原式新段階併行の特徴を有する一群であるといえるだろう。

(2) 千代川遺跡11次調査出土の凸帯文土器

次に千代川遺跡11次調査の凸帯文土器を見ていこう。第11次調査では凸帯文土器以外にも北白川上層式、宮瀧Ⅱ式、滋賀里Ⅲa式、篠原式と縄文時代後期前葉から晩期中葉までの土器が断絶を挟みながら出土している(樋口、吉田1987)。凸帯文土器は、口縁部凸帯が口唇部に接して貼り付けられており長原式土器の製作技法と類似する。北金岐遺跡出土の凸帯文土器と比べてみると口縁部刻みの幅が若干大きいことが指摘できる(図4-5～

7)。図2は北金岐遺跡と千代川遺跡11次調査で出土した凸帯文土器の口縁部凸帯の刻み目幅を比べたものであるが、北金岐遺跡のほうが千代川遺跡11次調査のもの比べて刻み目幅が小さいことが分かる。長原式土器の型式学的な変遷として刻み目幅が大きいものから小さいものへと変化することが指摘されており、この

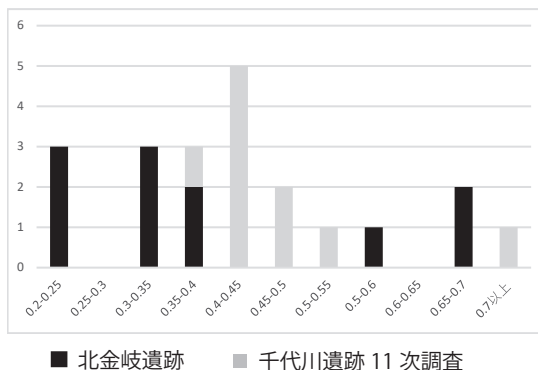


図2 北金岐遺跡と千代川遺跡の凸帯刻み目幅(cm)

変化は長原式土器だけではなく播磨地域の土器にも共通する。したがって、千代川遺跡11次調査出土の凸帯文土器は長原式古段階併行、北金岐遺跡出土の凸帯文土器は長原式新段階併行と考えることができ、両遺跡の凸帯文土器は時期差として理解できる。

4. 太田遺跡出土土器の様相

ここまで北金岐遺跡と千代川遺跡出土の凸帯文土器を通じて、縄文時代晩期後葉の時期について検討してきた。本節では弥生時代前期について見ていきたい。なお、弥生時代前期の土器編年としては、若林編年前期様相1を前期前葉、様相2を前期中葉、様相3を前期後葉、中期前半様相1古を前期末葉、中期前半様相1新を中期前葉とする(若林2018)。亀岡盆地において、弥生時代前期の土器は池尻遺跡や河原尻遺跡などで少量出土している中で、太田遺跡が突出して出土している。太田遺跡は前期末葉から中期前葉にかけて存在し、集落内部を多条環濠で囲む弥生時代前期の典型的な環濠集落である(村尾・田代1986)。しかし環濠内部の様相や集落の出現と消滅時期が未だ明確ではなく、再考の余地のある遺跡である。また、瀬戸内地域の逆L字口縁甕や東海の厚口鉢など他地域の土器も出土しており、交通の要所である亀岡盆地の流通形態を考える上でも重要である。よって本節では各遺構で出土している土器の時期を押さえることで、太田遺跡の出現から衰退までの様相について検討していきたい。

まずは、環濠内部に展開する土坑群について見ていきたい。環濠内部では平面プランが長方形を呈する方形土坑が多く分布している。この方形土坑は弥生時代前期に特徴的な土坑で、神戸市大開遺跡や和歌山市堅田遺跡でも検出されており、墓壇の可能性が指摘されているが、実際は未だ不明である。土器が出土している方形土坑SK100とSK205について見ていきたい。SK100出土の壺は頸部の長頸化が生じ始めているが、頸部文様は沈線を3条施し、その下端を縦ハケにより削り出している。甕は図3-2が頸部に沈線を3条、図

3-4は沈線を2条施し、どちらも口唇部が分厚く、そこに全面刻みを施す。SK205の壺は無文で口唇部が若干肥厚する。図3-7の甕は頸部に沈線1条が施されているが、頸部までの破片のため正確な条数は分からない。図3-6は頸部無文だが如意型口縁であり、口唇部に刻みを施す。それに加えて壺蓋が出土している。豆谷和之氏によると、弥生時代前期における壺蓋は前期後葉までは出土するが、前期末葉から減少または消失することが指摘されているため(豆谷2008)、前期後葉の遺構であると考えられる。また、SK130の壺は胴部に沈線を7条施すものや、胴部に貼り付け凸帯文を3条施すものが出土しており新しい様相を示すが、甕は頸部に沈線を2条以上施しており、SK130は前期後葉の遺構の可能性がある。環濠は3条めぐっており、内側からそれぞれ第1~3環濠とすると、SK100は第1環濠の内側、SK205は第1と第2環濠の間、SK130は第3環濠外側に存在し、3遺構ともまとまっておらず点在している。

環濠は報告者によると再掘削を行いながら短期間で埋没しているとされている。出土土器を見てみると、壺と甕ともに多条沈線と櫛描文が施される土器が共存しており、無文の甕も多く出土していることから、中期前葉の特徴をもつ。甕を見てみると、沈線が4条程度の個体も散見されるが、沈線が2条1対で施されており、前期にみられるような沈線を1条ずつ施す個体とは技法が異なる。また、環濠資料からは逆L字状口縁甕も出土している。日隈広志氏は姫路市千代田町遺跡出土の甕を分析し、胴部から口縁部まで緩やかに外反するものをⅠ類、胴部から口縁部までほぼ垂直に立ち上がる個体をⅡ類、胴部が膨らみ、内湾しながら口縁部に繋がる個体をⅢ類に分類し、Ⅰ類からⅢ類へと変遷することを示した(日隈2010)。太田遺跡から出土している逆L字状口縁甕にはⅠ類はなく、Ⅱ類とⅢ類であり、文様に関しても沈線と櫛描文が共存していることから、日隈編年Ⅱ-2段階となり、中期前葉の時期に収まる。大和型甕も口縁部が若干外側にまかれている。また、口唇部の刻みのうち単位的に刻みに比べて大きな押圧が施されており、これも中期前葉の特徴であるといえるため、他の器種の時期と比べても調和的である。環濠資料だけでなく、SK100・103・250以外の土坑から出土している土器も出土量が少ないながらも、おおむね中期前葉に属すると思われる。

表1 本稿の時期区分と平行関係

本稿における時期	先行研究の編年	
	若林編年(2015)	日隈編年(2010)
前期前葉	前期様相1	—
前期中葉	前期様相2	—
前期後葉	前期様相3	—
前期末葉	中期前半様相1古	Ⅱ-1段階
中期前葉	中期前半様相1新	Ⅱ-2段階

ここまで太田遺跡における遺構の時期について見てきたが、弥生時代前期中葉では、太田遺跡において環濠掘削段階以前に遺構が存在していることが分かる。亀

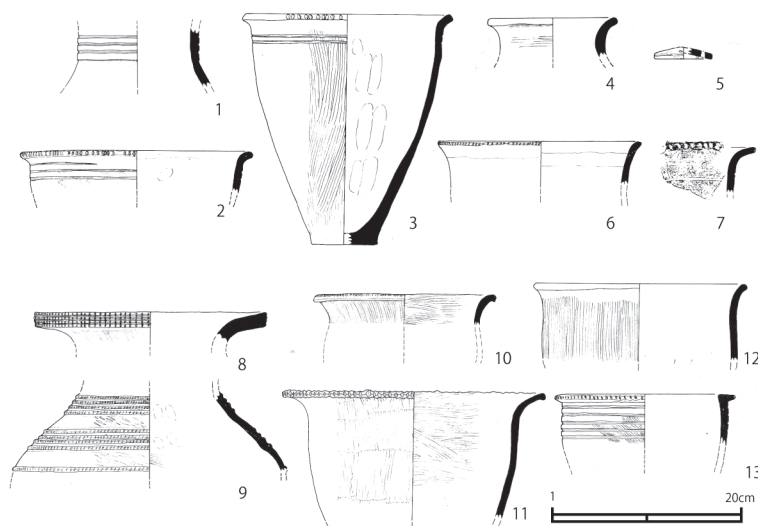


図3 太田遺跡出土土器

1～3 SK100、4～7 SK205、8～13 SD201・207

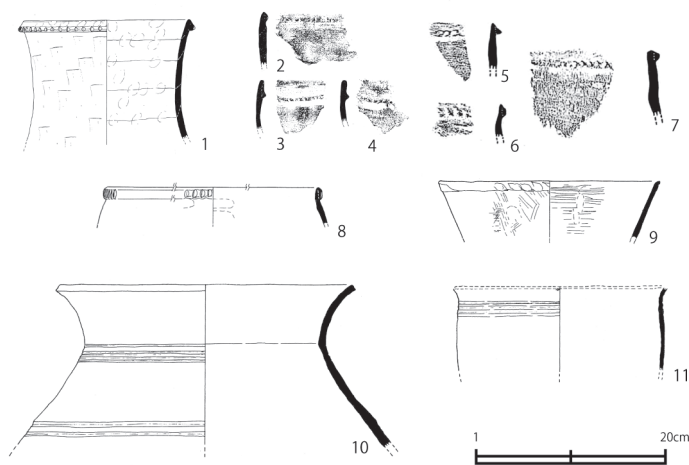


図4 亀岡盆地出土の凸帯文土器と前期弥生土器

1～4 北金岐遺跡、5～7 千代川遺跡第11次

8・9 池尻遺跡第7次E地区2号墓、10・11 大淵遺跡第4次

岡盆地全体に目を向けてみると、河原尻遺跡や蔵垣外遺跡第1次調査で前期中葉と考えられる甕が出土しており、亀岡盆地において前期弥生土器の製作開始期の遺跡は小規模に点在していることが分かる。この状況は前期後葉まで継続し、前期末葉において、太田遺跡のような環濠集落が出現する。しかし、太田遺跡の周辺では依然として余部遺跡や大淵遺跡、案察使遺跡、池尻遺跡で前期後葉から中期前葉の集落が点在していたことが分かっており、前期中葉からの集落形態を維持していたことも考えられる。このような状況は河内低地において、前期前葉に若江北遺跡のような小規模な遺跡が出現した後に、田井中遺跡のように環濠を巡らせる集落が出現するといった、遺跡の消長に類似する。亀岡盆地ではその展開が中期前葉に起こっていることが分かる。

5. 亀岡盆地における弥生時代前期前葉の様相についての予察

弥生時代前期前葉にあたっては桐井氏も指摘しているように、資料的な制約もあり不明な点が多い(桐井2016)。北金岐遺跡では播磨系の深鉢が、太田遺跡では逆L字口縁甕や厚口鉢が出土しており、その搬入ルートとして、西丹街道と乙訓-亀岡ルートの二つが考えられる。播磨地域においては、凸帯文土器と前期弥生土器の共伴時期幅は短期間に限定されており、神戸市新方遺跡の土器棺墓で形骸化した播磨系の凸帯文土器と前期前葉の大型鉢の共伴が確認できる。大開遺跡の環濠資料は播磨系の深鉢に時期差があると考えられ、前期弥生土器との共伴を確実視できない。一方、京都市雲宮遺跡や下鳥羽遺跡からは、京都盆地下で最古の前期弥生土器と共伴して、1条凸帯文を口縁部に貼り付けた1条凸帯文甕が少量組成し、弥生前期末葉で製作されなくなる。播磨系の深鉢は前期前葉の中でも早い時期(若林編年様相1古段階)で形骸化し、前期前葉の新しい段階(若林編年様相2新)には凸帯文土器と前期弥生土器との明確な共伴例は確認されていない。一方、乙訓でみられる1条凸帯文甕は、雲宮遺跡SX76第1層出土土器から前期後葉まで製作される可能性がある。この1条凸帯文甕は外傾接合で、外面もハケ調整を施しており、晩期後葉の凸帯文土器とは製作技法が大きく異なっており、口縁部に凸帯文を貼り付けることが共通している。このタイプの土器は亀岡盆地ではほとんど明らかになっていないが、池尻遺跡7次調査E地区2号墓で2点の凸帯文土器が出土している。この2号墓は周溝からは胴部に櫛描直線文を施す中期前半の壺とともに口唇部に薄い凸帯を貼り付ける土器が2点出土している。このようなタイプの貼り付け手法は亀岡盆地の縄文時代晩期の凸帯文土器には存在しない。亀岡盆地の他の遺跡では中期前葉に凸帯文土器は伴わず、山城でも存在しないため、池尻遺跡出土の凸帯文土器は中期前葉以降のものではなく、周溝の掘削に伴う混在と考えられる。このような凸帯の貼り付け手法の他にも器形や胎土、調整等において亀岡盆地で普遍的に出土する凸帯文土器と異なる特徴をもつ一群を抽出できれば前期前葉の土器群が明らかになる可能性があると考えられる。この土器が晩期の凸帯文土器とセット関係にあるのか、前期弥生土器とセット関係にあるのかは現在報告されている資料の中からは明らかにできていない。今後の資料整理や調査に期待したい。

6. 弥生時代前期から中期前葉における亀岡盆地の遺跡動態

弥生時代前期末から中期前葉においては太田遺跡で環濠集落が登場し、短期間の内に廃絶している。このように200~300mほどの面積の居住域の周りに環濠を掘削する集落は、雲宮遺跡や奈良県の川西根成柿遺跡、四条シナノ遺跡のように短期間で廃絶する例が多い。太田遺跡が廃絶してから、余部遺跡3次調査や南金岐遺跡、池尻遺跡7次調査で中期前葉の遺物が出土しているが、大規模集落は未だ見つかっておらず、小規模集落が点在する前

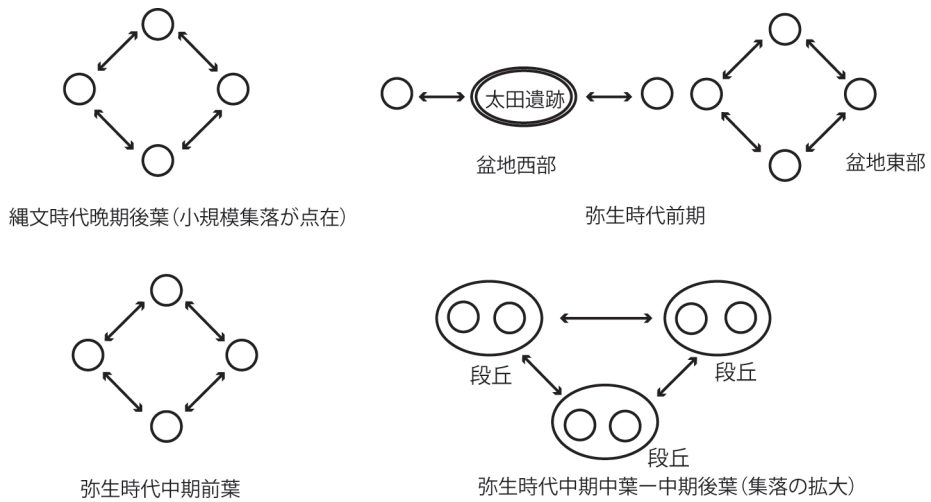


図5 亀岡盆地における縄文時代晩期から弥生時代中期後葉の集落動態モデル案

期の集落形態と同様であることが分かる。近畿地方全体で見ると、奈良盆地では唐古・鍵遺跡や坪井・大福遺跡のように中期前葉から集落が拡大し、それを回るように環濠が掘削される状況が見て取れる。これはこのような遺跡では複数の集落が近接して存在していると考えられ、集落規模が前期と比べて拡大する様相が追えるが、亀岡盆地ではその現象は見取れない。つまり中期初頭から前葉における集落様相は近畿地方中央部とは異なる様相が見てとれる。中期中葉から後葉になると池上遺跡や余部遺跡で竪穴建物10～15棟程度検出されており、集落規模が拡大している。詳しく見ると、池上遺跡では4次調査で半径100mほどの範囲に竪穴建物が2・3棟のまとまりをもって建てられており、余部遺跡も同様である。しかし、現在確認されている居住域から半径100～200mの範囲を超えて当該期の居住域が検出されている状況が確認されておらず、若林邦彦氏のいう基礎集団(若林2001)クラスターが形成されてはいない。前述の2遺跡に加え、方形周溝墓が多数調査されている時塚遺跡で居住域が検出される可能性があり、方形周溝墓が多数確認されている千代川遺跡では、周溝墓群の南に居住域が展開することが確認されている(京都府埋蔵文化財調査研究センター2025)。亀岡盆地では南北方向に大堰川が流れており、更に盆地内を小河川が流れ、その堆積作用によって形成された段丘上に遺跡が立地している。そのため、一つの段丘上の人々が移動しながら集落を形成していたと考えれば、基礎集団クラスターが出現する範囲はかぎられてくるだろう。これは河川堆積が頻繁に起こっており、それに対応するように集落が移動する大阪低地の遺跡動態と異なる地形状況に依るものだと考えられる。このように考えると、弥生時代中期の遺跡動態は、遺跡が立地する地形によって多様な形態をとることが分かる。亀岡盆地内では、弥生時代中期前半の遺跡規模は

前期と同様に小規模な遺跡が点在しており、中期中葉以降に遺跡規模が拡大することが指摘できる。また、景観の点から見ても両地域では異なる景観が推測できる。河内低地では河川堆積により遺構の埋没が早く、それにより人々が移動した先で集落を営む際、過去の遺構は認識できない状況になっている可能性が高いが、亀岡盆地の段丘上では河川堆積が頻繁ではないために遺構が完全に埋没せずに窪地状に、墳丘墓などはマウンドが残っていただろう。以上のように亀岡盆地内における縄文時代晩期後葉から弥生時代中期後葉までの遺跡動態について述べてきた。縄文時代晩期後葉の長原式から太田遺跡が廃絶する弥生時代中期前葉までは他地域の土器との併行関係と併せながらその帰属時期について検討してきた。しかし、弥生時代中期前葉以降の土器編年については不明な点が多く、在地土器と合わせた土器編年の構築が急務であろう。その後改めて集落動態を検討することで、本稿で指摘した遺跡動態の様相をさらに細かくみることが可能になってくる。また、亀岡盆地では弥生時代前期末葉に太田遺跡という近畿中央部と極めて親和性の高い集落が営まれながらも、中期前葉以降の集落動態は差異が生じる背景についても検討が必要である。

(はるな・ひでゆき = 当調査研究センター調査課調査員)

謝辞 本稿を執筆するにあたって、亀岡市教育委員会のみなさまには資料調査の際に格別のご配慮を賜りました。感謝申し上げます。

参考文献

- 泉拓良 1990 「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』8 奈良大学文学部文化財学科
(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2025 『千代川遺跡現地説明会資料』
- 桐井理輝 2016 「南丹地域における縄文・弥生移行期の様相」『弥生文化出現期前後の集落について』
第24回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集
- 田中元浩・三好 玄ほか 2025 『弥生後期社会の実像 集落構造と地域社会』古代学研究会編 六一
書房
- 中村健二 2000 「播磨系突帯文深鉢について」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 春名英行 2025 「西播磨地域における凸帯文土器の特質」『考古学と文化史2』同志社大学考古学研
究室編
- 樋口隆久・吉田野乃 1987 『千代川遺跡発掘調査報告概報』(亀岡市文化財調査報告書15) 亀岡市
教育委員会
- 日隈広志 2010 「西播磨における瀬戸内型甕と櫛描文のゆくえ - 弥生時代中期前半土器編年の再検討
を通じて -」『考古学集刊(6)』明治大学文学部考古学研究室編
- 豆谷和之 2008 「近畿前期弥生土器再編」『考古学研究』55巻第3号(通巻219号) 考古学研究会
- 村尾政人・田代 弘 1986 『太田遺跡』(京都府遺跡調査報告書第6冊) (財) 京都府埋蔵文化財調
査研究センター
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価 大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に」『日本考古学』
8巻12号 日本考古学協会
- 若林邦彦 2018 『弥生時代地域社会構造論』同成社